国民教育と教育改革を視点としたシンガポール歴史教育の考察
― 2021 年版中等段階歴史科シラバスと歴史科教科書に基づいて ―

宇都宮明子*

Akiko UTSUNOMIYA

A Study of Singapore History Education from the Perspective of National Education and Educational Reform: Based on the 2021 Secondary Level History Syllabus and History Textbooks

ABSTRACT

本稿の目的は，国民教育と教育改革を視点として，シンガポールの歴史教育を考察することで，その歴史教育の展開と課題を明らかにすることである。

第Ⅱ章では，シンガポール教育省が策定した 2021 年版中等段階歴史科シラバスを分析し，導入や重要な文献といった章では国民教育と教育改革の視点からの記載を併記し，内容の章では理念としての国民教育の視点を反映したシンガポールの発展のメタ物語で構成し，メタ物語の獲得とは相容れない教育方法と評価では教育改革の視点に即した歴史探究とその評価を提案するという章ごとに異なる理論的基盤に基づいて，シラバスが構成されていることを明らかにした。第Ⅲ章では，シラバスに準拠した中等段階歴史科教科書を分析し，シンガポールの苦難の歴史というメタ物語が描かれつつも，なぜシンガポールが陥落したのかという問いを一貫して探究するという歴史探究，それに関わるスキル，発展的な歴史探究がなされており，国民教育と教育改革の両視点が組み合わされた構成であることを検討した。第Ⅳ章でシンガポールの歴史教育の展開と課題を考察し，国民統合を図るシンガポールの歴史教育では真の歴史探究はなされておらず，従って，現在求められる教育改革に対応した資質・能力の育成を保証することはできないと評価した。

本研究での考察から，国際的な歴史教育学研究においては，諸外国の歴史教育改革やその歴史教育から拙速に示唆を得ようとするのではなく，どのような理念のもとでどのような論理に基づいた歴史的思考，歴史探究が図られているのかを慎重に検討することが不可欠であると結論づけた。

【キーワード：国民教育，教育改革，歴史探究，歴史的思考，シンガポール】

Ⅰ．研究の目的

日本の国際的な教育学研究は欧米を主たる研究対象としてきたが，近年，東アジアと欧米の比較教育学研究[1]，東南アジアの教育学研究[2]など，東・東南アジアを対象とする研究が増大している[3]。それらの研究では，教師教育，教育制度，大学改革，入試改革など研究領域が多岐に亘るとともに，欧米の教育と比較した類型化，その共通性や相違性が検討され，国際教育学研究は質・量ともに多層的・多重的な研究へと発展しつつある。

東南アジアの教育学研究において，とりわけ注目されているのがシンガポールである。2015 年の TIMSS では数学と理科の成績がともに首位，PISA 調査でも数学的リテラシー・科学的リテラシー・読解力全てにおいて首位，最新の TIMSS 調査（2019 年）と PISA 調査（2022 年）でも首位を独占し，トップレベルの成績を継続するシンガポールの教育に関心が向けられるのは必然といえる。そのため，シンガポールの教育に関しては，教育制度や教育課程から学校での実際の取り組みに至る理論と実践の両レベルにおける教育改革の展開を解明し，日本の教育への示唆を得ることを図る研究が多くなされている[4]。

本稿が研究対象とする社会科教育学研究においても，シンガポールの 21 世紀型コンピテンシーや歴史的思考力に着目した社会系科目のシラバス（日本の学習指導要領に相当），教科書，授業を分析する研究がなされている[5]。その一方で，シンガポールの教育改革とは異なる文脈として，シティズンシップの観点からの研究も散見される。多民族国家であるシンガポールでは多文化主義政策が採られ，シンガポール人としてのアイデンティティの育成を図る国民教育が積極的に推進される。そのため，社会科教育学研究では，シンガポールのシティズンシップ教育を，社会系科目のシラバスや教科書から検討する研究が蓄積されているのである[6]。社会科教育学研究では，市民性育成という教科固有の目標からもシンガポールの教育を研究対象にしてきたといえる。

先行研究を俯瞰すると，シンガポールのシティズンシップ教育は，SDGs とも関連づけて推進されるグローバル・シティズンシップ教育ではなく，国民統合を図るナショナル・シティズンシップ教育の側面が強いことが読み取れる[7]。1965 年の独立以降，経済的に困難を抱えたシンガポールでは，人的資源の開発が課題であり，経済の近代化と多様な民族集団を統合するナショナル・ア

* 島根大学教育学部社会科教育専攻

イデンティティの形成を図る教育改革が国家戦略とされてきた[8]。その一環として1997年に国民教育が導入されて以降，学校の全カリキュラムを通してナショナル・アイデンティティの形成が図られるシンガポールでは，ナショナル・シティズンシップ教育が重視されることは容易に想像できよう。そうであるとすれば，シンガポールのシティズンシップ教育を検討するには一定の留保が必要である。吉田剛は2006年版の小学校社会科シラバスを検討し，多重なシティズンシップにおいて批判的技能を持つ市民像が読み取れないこと，指導と評価ではナショナル・シティズンシップとの関連が示されず，単元の学習成果と価値態度とがつながらないままでナショナル・シティズンシップの育成が図られていること，その育成が強調されることによって，地理的基本概念や地理的技能に関する系統性が不鮮明であることがシンガポール教育の課題であると指摘する[9]。奥村みさは，独立以来の華人系・マレー系・インド系・その他に分類した国民統合政策が社会変動に伴い，プラグマティックな対応に迫られているという現状を指摘する[10]。いずれも，シンガポールのシティズンシップ教育が，グローバル・シティズンシップのもとでの市民を育成するシティズンシップ教育ではないことを問題とした指摘であることが窺える。

本来，ナショナル・シティズンシップを重視する社会科教育と，コンピテンシー志向の教育改革のもとでの社会科教育とは相容れないはずであるが，シンガポールでは，ナショナル・アイデンティティと教育改革に対応したコンピテンシーの双方の獲得を図る社会科教育がなされていると考えられる。そのため，シンガポールの社会科教育を考察するにあたっては，双方の獲得をどのように実現しているのかを考慮しながら検討する必要があろう。しかし，社会科教育に関する先行研究は，教育改革を踏まえた新たな社会科教育の動向を検討する研究，多文化教育やシティズンシップ教育を検討する研究のいずれかに重点が置かれ，前者の研究では育成が図られるコンピテンシーに着目して日本の教育への示唆を得る，後者の研究ではナショナル・シティズンシップ教育の展開とその成果や課題を指摘するものになりがちである。グローバル・シティズンシップがめざされる現状から，国民統合を図る社会科教育の妥当性を問うとともに，国民統合を図りつつ教育改革に対応した資質・能力を保証する社会科教育をどのように実現しているのかという展開と課題を検討することが，シンガポールの社会科教育を考察する意義と考える。

そこで，本稿は国民教育と教育改革を視点として，シンガポールの歴史教育を考察することで，その歴史教育の展開と課題を明らかにすることを目的とする。第Ⅱ章でシンガポール教育省が策定した2021年版中等段階歴史科シラバス（以下，シラバスと略す）[11]，第Ⅲ章でシラバスに準拠した中等段階歴史科教科書を分析し，第Ⅳ章でシンガポールの歴史教育の展開と課題を考察する。

Ⅱ．2021年版中等段階歴史科シラバスの分析

本章では，国民教育と教育改革の視点からシラバス構成を概観した上で，その構成を検討する。

（1）シラバス構成の概観

2021年にシンガポール教育省が策定したシラバスは，導入，内容，教育方法，評価，重要な文献という章からなる。国民教育と教育改革という2つの視点に基づいて，シラバス構成を示したのが表1である。

表1　2021年版中等段階歴史科シラバス構成

章	項目	内容	理論的基盤
導入	21世紀における歴史の価値	歴史的知識の本質を批判的に認識し，過去と現在を結びつける	歴史学
		規律ある批判的な精神を養い，不安定で不確実，複雑で曖昧な世界で活動する能力をつける	歴史学
		個人的・国家的・国際的なレベルでの事象の理解を通して，生徒のアイデンティティを育成する	国民教育
	歴史的概念	時代順，エビデンス，説明，因果関係，変化と継続，意義，歴史的エンパシー，多様性からなる歴史的概念を理解する	歴史学
	歴史学習者の資質	歴史学習者の資質は，理由づけ，探究，洞察，調和，豊富な知識，エンパシー，理路整然からなる	歴史学
	21世紀型コンピテンシー	歴史教育は，21世紀型コンピテンシーを育成する	教育改革
	国民教育	国民教育は，国民としてのアイデンティティ，市民的資質を育成する 歴史は，シンガポールの現在に至る過程をシンガポールの発展に関与した多様な人々の物語を通して多面的に描くことで，国民教育を強化する科目である	国民教育
	教育の望ましい成果	歴史教育を通して，教育の望ましい成果（自信のある個人，自律的な学習者，積極的な貢献者，関心ある市民）を上げる	教育改革
内容	前期中等段階の歴史科シラバスのデザイン	シラバスの目的は，生徒が現在のシンガポールを理解し，感謝することで国民としてのアイデンティティを身につけることである シラバスは，シンガポールの発展を形成した地域的・世界的な勢力と関連づけたメタ物語としてのシンガポールの歴史を描く	国民教育

	目的	現在を理解し，地域や地球市民として積極的かつ責任を持って貢献し，過去に対する個人的な関心を追究するために必要な歴史的知識・技能・価値観・態度を備える 歴史探究に積極的に参加し，自信を持って，自らを律して，批判的で内省的な思考をする人間に育てる 過去に関する根拠づけられた回答を導き出すために，探究心を高め，過去に関して重要な質問をし，その歴史的文脈において様々な史資料を批判的に検討する能力を育成する 歴史の主要な時代，社会，観点に関する知識と理解を習得する 過去が様々な理由や目的のために，どのように解釈され，表現され，重要視されてきたのかを理解する 多様なメディアを駆使して，多様な方法で歴史的知識と理解を整理し、伝達するための能力を育成する	歴史学
	学習成果	・知識と理解（歴史はエビデンスに基づき，多様な解釈がある，時代固有の重要な特徴，現在との関連，社会の発展を形成した個人・集団・思想など，変化の過程） ・スキル（事象・問題・勢力・発展に関して質問する，時代・事象・発展・問題を多面的に比較し，変化と継続を構築する，事象や状況の因果関係を検証する，社会の事象・場所・人物の歴史的意義を構築する，探究のために多様なメディアから得られた情報やエビデンスを解釈する，歴史における見方を確認する，歴史的知識と理解を一貫した方法で組織し，伝達する，歴史探究の方略と方法を熟考する） ・価値観と態度（人々の価値観や信念が特定の時間や空間の事象・発展・問題に関する解釈を形成する方法に対して敏感になる，文化的・知的・情緒的文脈が異なる時代や空間の人々や集団の思考･価値観･意思決定･行動を形成する方法を認識する，多様で時に対立する見解に対する寛容さと敬意を持つ，曖昧さに対処する，事象・発展・問題をよりよく理解するために質問する，健全な道徳的価値観に基づき，自分の考えや行動を修正し，適応する，道徳的な羅針盤となる価値観を認識する，文化的・経済的・政治的・社会的背景の異なる人々に共感する，自身と過去や現在のより大きな社会との結びつきを認識し，受け入れる，自分の行動が他者に与える影響に気づき，地域社会や国をよりよくするための行動への関与を促す）	歴史学 国民教育
	前期中等段階の歴史科シラバスの概要	ユニット 1：イギリス商館設立以前の世界貿易ネットワークの一部としてのシンガポールと世界の国々との関連 ユニット 2：1942 年の日本によるシンガポール陥落以前の 1819 年からのイギリス統治下の港町としてのシンガポールの経済的・政治的・社会的変化 ユニット 3：シンガポールがイギリスの植民地から独立国に至る過程と，独立に影響を与えた戦後の世界的勢力と地域勢力の相互作用 ユニット 4：独立した国民国家としてのシンガポールの新しい立場と，その時代の挑戦に打ち勝つことでのシンガポール人の帰属意識，現実感，希望がどのように促進されるのか	歴史学 国民教育
	歴史的な調査	歴史的な知識や技能を実社会で活用する機会を得て，21 世紀型コンピテンシーを育成する 歴史探究のテーマが，「コミュニティと経験」，「社会における科学と技術」である 各ユニットで考えられる歴史探究のトピックの列挙	歴史学 国民教育 教育改革
	シラバスの詳細	各ユニットの概要，核となる問い，主要な学習内容，学習成果，歴史的概念	歴史学 国民教育
教育方法	教育実践	歴史教育の重要な教育方法が歴史探究である 生徒の学習を促進するために，シンガポール教育法を参考にする	歴史学 一般教育学
	歴史探究	歴史探究のプロセス（好奇心をかき立てる，エビデンスを収集する，推論を訓練する，熟考的に思考する） 各プロセスの説明と，各プロセスでの教師の留意事項	歴史学
	歴史探究スキルの発達支援	直接指導－歴史的概念の明示的な指導，史資料の読解や歴史的知識の伝達のモデル化による指導 学習評価－各探究プロセスでの評価，教師による観察・質問・小テスト・ポートフォリオ・パフォーマンス課題・フィードバック	一般教育学 歴史学
評価	目的	適切な指導の決定や学習向上に向けた，生徒の学習と発達に関するエビデンスの収集と分析の過程 「学習のための評価」（形成的評価）と「学習の評価」（総括的評価）が有意義な歴史学習を促進し，21 世紀型コンピテンシーを育成する 形成的評価と総括的評価の双方からなるバランスのとれた評価システムが重要である	一般教育学 教育改革
	評価目標	目標 1：知識を展開する 歴史に関する知識と理解を思い起こし，選択し，組織し，表現する 目標 2：歴史的知識を伝達する 重要な歴史的概念や過去の人々の信念や感情や動機を理解して歴史的記述を構築する	歴史学

		目標 3：史資料の解釈と分析 史資料の活用において，歴史探究の一環としての史資料のジャンル，歴史探究のための方略と方法，過去の諸相が異なる方法でどのように解釈され，表現されているのかを理解し，検証し，分析する	
	評価方法	推奨する評価方法 史資料に基づく問い－歴史的事象や問題の探究に対応する史資料のエビデンスを分析し，解釈する方法を説明できるかの評価 構造化された問い－事象や発展を選択し，記述し，知識を応用し，説明する能力を示すことができるかの評価 歴史的な調査－生徒が選択した歴史的問題に協力して取り組む（計画，史資料の収集と検証，調査結果の集約と伝達，歴史探究過程の熟考）ことができるかの評価	歴史学
文献		評価，探究，各単元に関する文献を紹介する	一般教育学 歴史教育学 歴史学

（シラバスを基に筆者作成）

表 1 は，横軸に章，項目，内容，理論的基盤を設定し，縦軸では，各章の項目から国民教育と教育改革に関わる箇所を内容として抽出し，その内容の理論的基盤を示すことで，どのような理論的基盤がシラバスを規定しているのかを明らかにすることを図る。

導入の「21 世紀における歴史の価値」では，歴史を学ぶ価値として，過去と現在との関連，批判的な精神の涵養，アイデンティティの育成が掲げられ，前二者は歴史学，後者は国民教育が理論的基盤であると考えられる。「歴史的概念」と「歴史学習者の資質」は，歴史学から導かれている。「21 世紀型コンピテンシー」は，2010 年の「カリキュラム 2015」で提示された，21 世紀に求められるコンピテンシーとその養成に向けたカリキュラム・フレームワークであり，教育改革の文脈に位置づく。「国民教育」はまさに国民教育そのものであり，歴史シラバスの導入に掲げられる重要な基盤となっている。「教育の望ましい成果」において列挙された，自信のある個人，自律的な学習者，積極的な貢献者，関心ある市民は，21 世紀型コンピテンシーがめざす市民像であり，教育改革に起因する。

内容の「前期中等段階の歴史科シラバスのデザイン」に記載されたシラバスの目的は，国民としてのアイデンティティの獲得であり，歴史はシンガポールの発展に関するメタ物語とされる。このシンガポールの発展の物語を獲得することで，ナショナル・アイデンティティを身につける国民教育を主軸としてシラバスがデザインされていることが分かる。一方で，「目的」では，地球市民としての貢献，個人的な関心の追究，歴史探究，史資料の批判的検討，歴史の主要な概念の理解，過去解釈，メディアを活用した探究方法といった歴史探究がシラバスの目的とされる。「学習成果」では，社会の発展を形成した個人・集団・思想の理解に国民教育の要素がみられるが，基本的には知識と理解，スキルは歴史学に準拠すると判断される。その一方で，価値観と態度では，多様な価値観に対する敏感さ，多様な視点への寛容さと敬意など多文化主義や寛容がみられるものの，道徳的な羅針盤となる価値観の認識，地域社会や国家をよりよくする行動への決意など国民教育に根ざした価値観や態度の形成も図られる。「前期中等段階の歴史科シラバスの概要」では，14 世紀のテマセクからイギリス植民地時代，日本による陥落を経て独立に至るシンガポールの発展過程と，独立した国民国家の課題を克服するシンガポール人の行動や生き方からなる 4 つの単元が示される。1299 年から 1800 年代初頭，1819 年から 1942 年，1942 年から 1965 年，1965 年から 1970 年代後半の 4 期に分け，主にシンガポールの現在に至るまでの発展を理解する上で重要な政治・経済の分野に関する歴史的出来事が列挙される。これらの歴史的出来事の選択，さらには，国家の存続を図るための帰属意識とナショナル・アイデンティティを重視する第 4 単元の構成には，国民教育が大きな影響を及ぼしている。「歴史的な調査」では，歴史学の成果を活用した 21 世紀型コンピテンシーの育成がめざされ，歴史学と教育改革を踏まえた探究となっているが，テーマ「コミュニティと経験」では，シンガポールの世代を越えた物語，シンガポールの人々がどのように経済的，社会文化的に貢献してきたのかという社会の発展と人々の関わりが，テーマ「社会における科学と技術」では，科学技術の革新が時代を経てシンガポールの発展にどのような影響を及ぼしたのかを探究する。いずれのテーマでもシンガポールの発展に焦点が置かれ，テーマ設定に国民教育が影響していることが分かる。「シラバスの詳細」では，前述の概要を踏まえた各単元の詳細が示される。各単元では歴史的概念を活用して獲得すべき学習成果（知識，スキル，価値観と態度）が列挙され，一見すると歴史学に依拠しているようであるが，いずれの単元でも発展に関するメタ物語が描写され，とりわけ第 4 単元では国民としての帰属意識とナショナル・アイデンティティの確立が強調されており，単元全体を通して国民教育の理念が貫かれていることが読み取れる。

教育方法の「教育実践」では，歴史探究を教育方法とすること，その促進のためにシンガポール教育法を参考にすることが明記され，肯定的な教室環境，授業準備，授業実施，評価とフィードバックという 4 つの基本的な教授過程と，各過程の具体からなる教育実践という教科を越えた一般教育学の成果を踏まえた歴史探究が求めら

れる。「歴史探究」においては，好奇心の刺激，エビデンスの収集，推論，熟考的思考の段階からなる歴史探究の過程が示され，各段階の説明と教師の留意事項が記載されることで，探究の具体像が明らかになる。そして，前期中等段階から後期中等段階を通して，歴史探究をどのように深めていくのかという探究の深化がレベルで提示されるとともに，教師の指導と足場かけによる生徒に応じた多様な歴史探究を提供する必要性が記載され，教育的配慮をしながら，歴史学の成果に基づく歴史学習としての探究が推奨される。「歴史探究スキルの発達支援」では，歴史探究能力を育成する指導方略として直接指導と学習評価が挙げられ，生徒の歴史探究能力を一般教育学の成果を活用して育成，評価することが求められる。

評価の「目的」では，形成的評価と総括的評価を中心とした体系的な評価システムを通して生徒の学習とその成長をエビデンスに基づいて分析し，21 世紀型コンピテンシーを育成するという，一般教育学を援用した教育改革の推進が図られる。「評価目標」では，知識を体系化して表現する，その歴史的知識を伝達する，史資料を解釈，分析するという歴史教育を通してできるようになるべき３つの目標が示される。この評価目標は歴史探究と密接に関連し，歴史学に依拠する。「評価方法」では，「評価目標」と対応して，学習成果としての知識やスキルの到達度評価において推奨される評価対象が記載されており，それらは主として生徒の歴史探究を評価するものである。

重要な文献では，評価，探究，各単元に分類され，評価では一般教育学と歴史教育学に関する文献，探究では教育や探究全般，歴史固有の探究に関する文献，各単元では基本的にはシンガポールの発展を描くための各時代に関する歴史学の文献が挙げられる。

以上のシラバス構成の概観から，各章の各項目は，歴史学，歴史教育学，一般教育学，教育改革，国民教育が理論的基盤としての役割を果たすために，多岐に亘って入り組んだ複雑な構成になっていることが分かる。

（2）シラバス構成の検討

本項では，シラバス構成を国民教育と教育改革の視点から検討する。前項のシラバス構成の概観から，シラバス構成の特徴を挙げることができる。第１が，導入では，国民教育と教育改革の視点が混在していることである。歴史学習者の資質を育成する歴史教育を経て 21 世紀型コンピテンシーを身につけた市民と，ナショナル・アイデンティティを有する国民という市民像と国民像が併記して記載される。

第２が，内容では国民教育がシラバスを規定することである。前述の通り，国民教育に基づいてシラバスがデザインされているため，シラバスの目的が歴史探究であるとされているものの，国民教育に根ざした価値観や態度の形成が図られ，単元全体を通して，シンガポールの現在に至るまでの発展のメタ物語，さらなる発展に向けた国民としての帰属意識とナショナル・アイデンティティの強化がめざされ，国民教育のもとでの歴史探究であると判断される。

第３が，多重なアイデンティティの形成を図るシラバス構成ではないことである。第２の特徴から窺える通り，シラバスは多文化共生のグローバル・シティズンシップではなく，シンガポールのさらなる発展に向けた多民族の国民としての統合と人的資源の確保を目的としたナショナル・アイデンティティが重視されている。

第４が，教育方法と評価では，教育改革がシラバスを規定することである。教育方法と評価は密接に関連しており，教育改革のもとで質保証が図られるシンガポールの現状において，全単元を通して歴史探究を進めることで，歴史学習者の資質を累積的に育成し，その育成を評価するという意図が現れている。

第５が，重要な文献は，教育改革と国民教育双方の視点から選択されていることである。評価と探究では，教育改革の視点から教育方法と評価に関わる文献が選択される。各単元では，シンガポールの発展に関する文献が挙げられ，国民教育の視点からシンガポールのメタ物語の形成に重要な文献が選択される。

以上のシラバス構成の特徴から，導入や重要な文献では，国民教育と教育改革の視点からの記載を併記し，内容は理念としての国民教育の視点を反映したシンガポールの発展のメタ物語で構成し，規定されたメタ物語の獲得とは相容れない教育方法と評価では教育改革の視点に即した歴史探究とその評価を提案するという章ごとに異なる理論的基盤に基づいてシラバスが構成されていることが判明した。

Ⅲ．歴史科教科書“Singapore: A Journey Through Time, 1299-1970s”の分析

本章では，前期中等段階用歴史科教科書“Singapore：A Journey Through Time, 1299-1970s”（以下，教科書と略す）を概観した上で，その構成を国民教育と教育改革の視点から検討する。シンガポールでは前期中等段階の生徒が使用する歴史科教科書は本教科書のみであるため，実質的にはシラバスに準拠した国定教科書である。

（1）教科書構成の概観

本教科書は，2021 ～ 2022 年にかけてシンガポール教育省が発行した前期中等段階の歴史教科書であり，シラバスにある通り，1299 年～ 1970 年代後半までを対象とする。テマセクから日本軍による陥落までが第１巻[12]，日本占領から独立後の 1970 年代後半までが第２巻[13]という２分冊からなる。本節では，まず全２巻の全体構成，次に章構成を概観する。

①全体構成の概観

本教科書の全体構成を示したのが，次頁の表２である。

本教科書は，導入，シンガポールが海の街を意味するテマセクと呼ばれていた時代からイギリスの植民地になるまでの１・２章，イギリスの植民地時代から日本軍に降伏するまでの３～５章，日本の占領下からイギリスの統治を経て独立するまでの６～８章，独立から 1970 年

表２　歴史科教科書“Singapore：A Journey Through Time, 1299-1970s”の全体構成

第1巻	導入：歴史とは何か
	単元１：概観　テマセクからシンガポールへ（1299 年－ 1800 年代初頭）
	１章：初期シンガポールは地域や世界とどのように結びついたのか
	２章：シンガポールはどのようにして英国商館になったのか
	単元２：概観　イギリス下の港湾都市としてのシンガポールの発展（1819 年－ 1942 年）
	３章：1819 年から 1942 年において，イギリスの統治と海外発展が港湾都市としてのシンガポールの成長にどのような影響を与えたのか
	４章：シンガポールの人々は 1819 年から 1942 年までの港湾都市としてのシンガポールの発展にどのような役割を果たしたのか
	５章：なぜシンガポールは第二次世界大戦で日本軍に陥落してしまったのか
第2巻	単元３：概要　独立に向けたシンガポールの苦闘（1942 年－ 1965 年）
	６章：日本の占領下でシンガポールの人々は何を経験したのか
	７章：第二次世界大戦後のイギリスの統治に対して，シンガポールの人々はどのように対応したのか
	８章：シンガポールはどのようにして独立国家になったのか
	単元４：概観　独立した国民国家としての存続（1965 年－ 1970 年代後半）
	９章：1965 年以降，シンガポールはどのようにして独立を守ったのか
	10 章：独立後，人々の生活はどのくらい変化したのか
	終結：あなたは何を学んだのか

（教科書を基に筆者訳出）

代後半までの９･10 章，終結で構成される。

導入の前半では，まず生徒自身の登校初日の出来事を記載し，それを同級生と共有する活動を行う。次に，歴史とは単なる過去ではなく，何に焦点を置くのか，どのように表現するのかによって異なる描写であることが記載される。この前半部は関連づけられており，同級生と共有する活動で，登校初日という同じ日であっても，生徒各自で異なって記述されることに気づき，その自分史における気づきを後半の歴史に援用し，歴史が過去そのものではなく，過去の描写であると認識することが図られる。

導入の後半では，まず，歴史は描写であるという前半部を受け，歴史がどのように構築されるのかを考える。有益なエビデンスに基づいて歴史を構築する歴史家が扱う問いや史資料の具体例が示される。例えば，誰が，いつ，どこで，なぜ史資料を作成したのか，何のために史資料を活用するのか，史資料は過去について何を語るのかといった問いであり，史資料の具体例は，現物資料，絵画資料，地図資料，文献史料，インタビューなどである。そして，過去についての問いを設定し，その問いに回答するために史資料を収集，検証し，論理的な結論を導くために根拠づけるという歴史家の一連の活動が，歴史探究であることが示される。次に，人々が過去に経験したことを理解する，未来を予測するために過去と現在を結びつける，日々の生活に有益な批判的思考スキルを獲得するという歴史を学ぶ意義が提示される。

導入では，歴史とは歴史探究を通して構築された描写であることを認識するとともに，歴史を学ぶ意義を確認する。導入は，次章以降での歴史探究に向けた準備段階に位置づく。

各単元は見開き２頁からなり，各単元で何を学ぶのか，何を探究するのかを概要する各章の導入部に相当する。

各章は，全て疑問形のタイトルになっており，その章の歴史探究のテーマが一目瞭然である。各章は，教科書冒頭に挙げられた，本教科書の３点の特徴に即して構成される[14]。第１が，学習を導き，確実にするための特徴である。各章では探究の問い，学ぶ内容，内容の把握を支援する年表が提示され，各章での歴史探究が確実になされるよう配慮されている。第２が，スキルや概念的理解を高めるための特徴である。各章では，「スキルを学ぶ」，「若い歴史家になる」，「探究の事例」といった小単元が設定され，各章の特性に合わせて，例えば，地図読解，推論，統計データの解釈といったスキルや，エビデンス・因果関係・変化と継続といったシラバスの歴史的概念を獲得したり，各章で設定された歴史探究とは異なる探究の問いのもとで，探究を深めたりすることが求められる。第３が，理解を深め，探究を高めるための特徴である。歴史上の人物や出来事，発展に関する理解を深めるためのイラストつきの物語が描かれたり，各章の内容に関する興味を引く写真とその説明文，重要人物の紹介文が掲載されたりして，生徒が興味を持って各章の内容を理解したり，探究したりすることが意図される。

終結は，見開き２頁からなり，前頁で２年間の学習で学んだテマセクから現在までのシンガポールの発展の過程を文章と写真で概観し，後頁で高層ビルが立ち並ぶ現在のシンガポールの風景写真からシンガポールの発展を視覚的に捉えることで締めくくる。

本教科書の全体構成を概観すると，シンガポールの現在の発展に至るまでの過程を把握すること，そして，歴史の構築性を前提として，歴史家のように歴史的概念を踏まえて，多様な史資料を活用しながら問いを探究することで，生徒自身が探究の問いに回答する歴史描写を形成するという一貫した歴史探究がめざされていることが窺える。

②章構成の概観

前項で検討した全体構成を踏まえ，各章ではどのような歴史探究がなされているのかを考察する。シンガポールの発展の危機的状況としての日本によるシンガポール陥落を扱った５章「なぜシンガポールは第二次世界大戦で日本軍に陥落してしまったのか？」を分析対象とする。それは，歴史探究にとり最も重要な「なぜ」という事象の説明を求める問いが設定されているのは本章のみであり，歴史探究の検討において最適な章であると考えられるからである。本章の構成を示したのが表３である。

表３　５章「なぜシンガポールは第二次世界大戦で日本軍に陥落してしまったのか」の構成

小単元	学習内容	意図
導入	イギリスの最悪の惨事とされるシンガポール陥落がなぜ起きたのか，なぜイギリスは短期間に敗北したのか，なぜシンガポールは日本に対して防衛できなかったのかという問題提起	なぜ第二次世界大戦中に日本がシンガポールを侵攻したのか，なぜシンガポールが陥落したのかという本章を貫く問いの設定
年表	＜国際的情勢＞ ・ペリー来航から明治維新，日本の中国侵攻，アメリカの対日石油輸出禁止，タイ南部とマレーシア北部への上陸と真珠湾攻撃によるアジア・太平洋戦争の勃発に至るまでの日本の情勢 ・第一次世界大戦によるドイツの弱体化とヒトラーの政権掌握，ドイツのポーランド侵攻とフランス敗北によるイギリスの苦境といった第二次世界大戦を巡るヨーロッパの情勢 ＜国内的情勢＞ 1921 年のイギリスによる海軍基地設置決定と海軍基地と防衛の完成と，1942 年のイギリスの降伏までの経過	国際的文脈と地域（シンガポール）的文脈での時間軸の把握
若い歴史家になろう	因果関係を読み解く３つの観点 ・歴史的出来事が起きた幅広い文脈 ・歴史的出来事が起きた直接的・地域的な状況 ・歴史的な立役者の役割 →歴史的出来事の原因を検証する	本章における歴史探究方法の提示
なぜ 1941 年にアジア・太平洋戦争が勃発したのか	アジア・太平洋戦争の勃発に至るまでの経緯 ・ナチ・ドイツの台頭 　第一次世界大戦でのドイツの弱体化とヒトラーとナチ党の支持増大とドイツ軍の再構築 ・日本の台頭 　ペリー来航以後の日本の近代化とそれに見合った資源の不足，それを解消するためのアジアへの帝国建設を図る野望 ・1930 年代後半以降の国際的・地域的情勢 　ヒトラーのポーランド侵攻による第二次世界大戦の開始とフランスの敗北によるドイツに有利な戦局 　アメリカの対日石油禁輸以降も中国からの撤退を拒む日本の真珠湾攻撃とタイ南部とマレーシア北部への上陸による第二次世界大戦のアジア・太平洋地域への拡大 　植民地の防衛を犠牲にした本土の防衛への焦点化を余儀なくされたイギリスの苦境	アジア・太平洋戦争に至る理由を考察する前提となるドイツと日本両国の動向の時系列での把握
シンガポールは本当に難攻不落の要塞だったのか	・日本による豊富な資源供給他とマラッカ海峡の重要な航路としてのマレーシアとシンガポールの位置づけ ・日本を大英帝国の脅威とみなしたイギリスの「シンガポール戦略」による巨大な海軍基地の建設と軍用飛行場の設置 ・「シンガポール戦略」におけるシンガポールの人々による難攻不落の要塞としてのシンガポールへの確信 ・ヨーロッパにおけるナチ・ドイツの台頭と第二次世界大戦の勃発によるイギリスの「シンガポール戦略」の破綻 ・シンガポールの防衛と海軍基地にとり重要なマレーシアの防衛をジャングルがある北部ではなく，海のある南部と東部に重点化するという防衛計画の破綻 ・マレーシア北部での軍用飛行場の設置による防衛計画の変更	イギリスの防衛計画の破綻を巡る難攻不落の要塞としてのシンガポールの考察
スキルを学ぶ	・史資料比較の段階 段階１：問いの理解，段階２：比較の基準の確定，段階３：史資料の推測（史資料の読解と比較の基準に基づく推論），段階４：比較の基準を活用した各史資料での推論の調整	シンガポールが難攻不落の要塞であったのかを考察するための史資料

	・事例に基づく史資料比較の実施 4つの段階に即して2つの文献資料を比較した後，3つめの文献資料で比較を深めることでのシンガポールが難攻不落の要塞であったのかに関する考察	比較スキルの育成
イギリス軍	・イギリス本土に比したシンガポールとマレーシア防衛計画の低い優先度に起因する軍事力の欠如（時代遅れのバッファロー戦闘機，大英帝国の多くの植民地兵からなる軍の統率力の欠如，東南アジア防衛に消極的なイギリス国民） ・マラヤとシンガポールに派遣された軍の訓練と装備の欠如，多様な兵士からなる軍事力を率いた経験のないアーサー・パーシヴァル将軍による指揮，2つの軍艦からなるForce Zにおける不十分な軍備 ・戦略の立役者（パーシヴァル将軍）の人物像 ・日本の飛行機によるForce Zの沈没がもたらしたイギリス海軍の大打撃	イギリスのシンガポールとマレーシアの防衛計画の破綻とイギリス海軍が敗北する過程の把握
日本の計画と戦略	・第二次世界大戦以前からの日本のシンガポールとマラヤ侵攻に向けた準備（スパイによる情報収集と特別調査部門の設置） ・特別調査部門長の辻政信大佐による北部からのシンガポール侵攻計画の実行 ・経験豊富で，強い意志を持った日本軍と豊富な軍備，統率力のある山下奉文将軍の指揮 ・戦争の立役者（山下奉文将軍）の人物像 ・文献史料に基づく日本人兵士の戦争への意志の考察 ・文献史料に基づく日本人兵士とイギリス兵士の装備の比較	イギリス軍と比較した日本軍の戦略の優越性の把握
マラヤとシンガポールはどのように陥落したのか	1942年1月27～30日の海軍基地の破壊から1942年2月15日のパーシヴァル将軍と山下将軍の会合によるシンガポール陥落に至るまでの歴史的出来事の列挙 ・降伏を拒否し，抵抗を続けたマラヤ連隊のアドナン・ビン・サイディ中尉の人物像	シンガポールが陥落に至るまでの戦いの経緯の理解 日本の侵攻に抵抗したシンガポール人の苦闘の把握
若い歴史家になろう	シンガポール陥落の因果関係を読み解く3つの観点での検証 ・国際的文脈 ・地域的状況 ・軍事的・政治的指導者の選択と決定 ＜国際的文脈＞ 大規模戦争を展開していたイギリスと，東南アジアの攻撃に焦点を置いた日本という東南アジアにおける日本の優位 ＜地域的状況＞ 兵力や物資が欠如した中での戦いを余儀なくされ，経験や訓練に乏しいイギリス軍と，戦いに向けて入念に準備をしてきた日本軍という両国の相違 ＜戦争の立役者＞ 戦争の立役者（ウィンストン・チャーチル首相）の人物像 首相としてイギリス本土の防衛を優先したチャーチル，パーシヴァル将軍と山下将軍の果たした役割 →3つの観点でのシンガポール陥落の要因（例．イギリスの防衛，日本軍，Force Zの沈没，ヨーロッパの戦争，パーシヴァル，山下など）の分類と図化	シンガポール陥落の因果関係を明確にする歴史探究
探究の事例	事例調査 パーシヴァル将軍について記述した3つの文献と，イギリス軍と日本軍の被害状況を示した表を根拠としたパーシヴァル将軍を非難すべきかどうかの評価	シンガポール陥落に関わる人物像に関する歴史探究

（教科書 pp.171-205 を基に筆者作成）

表3は，横軸に小単元，学習内容，意図を設定し，縦軸では，各小単元の主要な学習内容を抽出し，その内容が選択された教科書の意図を示すことで，本教科書がどのような意図で構成されているのかを明らかにすることを図る。

「導入」では，日本軍に降伏するイギリス軍司令官の写真とともに，なぜ第二次世界大戦中に日本がシンガポールを侵攻したのか，なぜシンガポールが陥落したのかという本章を貫く問いが提起される。

「年表」は，国際的情勢と国内的情勢に区分され，国際的情勢では，ペリー来航による近代化からアジア・太平洋戦争に至るまでの日本の情勢と，第一次世界大戦以降のナチ・ドイツの台頭と第二次世界大戦に至るドイツの情勢が時系列の年表で示される。国内的情勢では，イギリスによるシンガポールへの海軍基地の設置からイギリスの降伏に至るまでのシンガポールの情勢が年表で掲げられる。

「若い歴史家になろう」では，シラバスに示された歴史的概念である因果関係に基づいて歴史を探究する。歴史的出来事の背景にある国際的な文脈，地域的な状況，出来事に関係する立役者という3つの観点から，シンガポール陥落を探究するという本章での歴史探究方法が示される。

「なぜ1941年にアジア・太平洋戦争が勃発したのか」では，前述の年表の時系列に即して，大英帝国と国際平和の脅威としてのナチ・ドイツと日本が台頭し，戦争に

至るまでの経過がイラストつきの物語でより詳細に記載され，なぜ両国が戦争をするに至ったのかを考察する前提としての両国の動向を把握することがめざされる。

「シンガポールは本当に難攻不落の要塞だったのか」では，日本にとってのシンガポールの戦略的意義，その脅威に対するイギリスのシンガポール戦略と，それに基づく難攻不落の要塞としてのシンガポールに対するシンガポール人の自信や確信，ナチ・ドイツの台頭と第二次世界大戦の勃発によるシンガポール戦略の破綻，南部と東部に重点化したマレーシアの防衛計画の破綻が記述される。具体的には，シンガポールに対する日本の脅威が増大する中でイギリスが進めたシンガポール防衛計画がヨーロッパでの第二次世界大戦の勃発によって，イギリスのマレーシア防衛計画におけるジャングルのある北部からの日本の侵攻は不可能とした見通しが誤算となったことで破綻したことである。そして，生徒にシンガポール戦略の想定が現実的であったのかどうかを考えさせる場面も設けられる。本小単元では，イギリスの防衛計画の失敗により，難攻不落の要塞と考えていたシンガポール人の期待が打ち砕かれ，シンガポールは難攻不落の要塞ではないことが明らかにされる。

「スキルを学ぶ」では，史資料を比較するスキルを学習する。ここでは，難攻不落の要塞としてのシンガポールに関する史資料を事例に，史資料を比較するための問い，比較の基準の確定，史資料の推測，推論の調整という４つの段階からなる史資料比較を実施する。文献史料１が，シンガポールを難攻不落の要塞と考えるシンガポール人事務員の記述，文献史料２が，難攻不落の要塞としてのシンガポールという伝説にだまされるべきではなかったとするシンガポール政府の防衛秘書官の記述，文献史料３が，難攻不落の要塞はありえず，陸側からのシンガポールの攻撃を不可能であるとみたイギリス軍を正当化するイギリスの歴史学者の記述である。まずは，シンガポールは難攻不落であったのかという問いに対して，シンガポールは要塞であったのかを基準として文献史料１・２を検討し，要塞であったという推測を文献史料１から，要塞ではなかったという推測を文献史料２から導く。そして，文献史料２・３を比較し，シンガポールは要塞であったのかに関して両資料の見解を調整する。本小単元は，シンガポールが難攻不落の要塞であったのかを探究することで，史資料比較スキルの育成を図る小単元である。

「イギリス軍」では，第二次世界大戦の勃発とナチ・ドイツに対して不利な戦局にあるイギリスがシンガポールの防衛計画の優先度を下げたことによる軍事力の欠如，派遣された軍隊の訓練と装備の不足，経験と能力は備えているが，多民族からなる軍隊を率いたことのないパーシヴァル将軍による指揮といったイギリス軍の防衛計画の破綻と，日本軍の攻撃によるイギリス海軍の大打撃に至る過程が記述される。パーシヴァル将軍に関しては，第一次世界大戦で多くの栄誉を得て，防衛計画の責任者としてマラヤに赴任し，日本の侵攻を阻むために，タイ南部を占拠する計画を立てるものの，イギリス政府がタイ政府への配慮から本計画を認めなかったことがコラムで紹介される。そして，イギリス軍のシンガポールとマラヤの防衛計画が現実的であったのかを考察する場面が設定される。本小単元では，第二次世界大戦の勃発によりシンガポール防衛計画が破綻し，イギリス海軍が大打撃を受けるまでの経過を把握する。

「日本の計画と戦略」では，第二次世界大戦以前からのシンガポール侵攻に向けた日本の入念な準備，イギリスのシンガポール戦略を破綻させる北部からの侵攻計画，経験も意志も統率力もある山下将軍の指揮によって着々とシンガポール侵攻を進める日本軍の計画と戦略が記述される。山下将軍に関しては，シンガポール侵攻前の輝かしい軍歴，「マレーの虎」と呼ばれ，優れた戦略でイギリス軍から勝利を勝ち取った将軍であることがコラムで紹介される。さらに，シンガポール上陸の際の心構えを示した日本軍のパンフレットから戦争への強い意志を読み取ったり，イギリス兵の回顧録や自転車で移動する日本兵の写真からイギリス兵と比較した日本兵の装備の有効性を考察したりする。本小単元では，イギリス軍と日本軍を比較し，戦争に向けた入念な準備，優れた指揮官といった日本軍のイギリス軍に対する優越性を把握する。

「マラヤとシンガポールはどのように陥落したのか」では，1942 年 1 月 27 ～ 30 日の海軍基地の破壊から 1942 年 2 月 15 日のパーシヴァル将軍と山下将軍の会合によるシンガポール陥落に至るまでの重要な９つの歴史的出来事が，その出来事が起きた場所を示す地図とともに記載される。さらに，マラヤ連隊で日本軍に抵抗し，殺害されたアドナン・ビン・サイディ中尉の人物像が紹介される。本小単元では，シンガポール陥落に至るシンガポールでの戦いの経緯と，その厳しい戦局においても最後まで抵抗し続けるシンガポール人の苦闘を理解する。

本章の前半部にも設定された「若い歴史家になろう」が，後半部で再度設定され，因果関係を読み解くための国際的文脈，地域的状況，出来事に関係する立役者という３つの観点を再確認する。さらに，本文に設定された結論では，シンガポールは陥落を運命づけられていたのかという問いのもとで，シンガポールの陥落理由が３つの観点に即して記述される。そして，イギリスの防衛，日本軍，Force Z の沈没，ヨーロッパの戦争，日本の真珠湾攻撃，パーシヴァル，山下，チャーチルという項目を３つの観点で分類し，説明文をつけながらそれぞれを関連づける図の作成が求められる。本小単元では，シンガポールが陥落に至る因果関係を明確にする歴史探究が意図される。

「探究の事例」では，本章を貫く因果関係を明らかにする歴史探究とは異なる歴史探究が求められる。ここでの探究は，シンガポール陥落に対するパーシヴァル将軍の責任の是非である。パーシヴァル将軍に対する多様な解釈が存在するという本文記述を踏まえて，パーシヴァ

ル将軍に関する４つの資料が提示される。資料Ａが，勇敢で思いやりがあるが，軍司令官として状況を変える能力や人々を統率する能力に欠けていたとするイギリスの歴史家による文献史料である。資料Ｂが，勇気，参謀としての能力や軍の安全衛生への配慮といった優れた資質を評価しつつも，その能力を遙かに越えた責任を与えられ，指揮できなかったとするイギリスの歴史家の文献史料である。資料Ｃが，戦争物資，指揮官の経験，軍隊の訓練といった，あらゆる戦争準備が不足する中で戦わざるをえなかったことが戦争に敗北した理由であるとするパーシヴァル自身の回顧録である。資料Ｄが，1941 年 12 月７日時点での戦闘部隊，戦車，軍用飛行機，軍艦からなる軍事力を日本とイギリスで比較する表である。この表からは，日本軍がイギリス軍よりはるかに軍事力を備えていたことが読み取れる。パーシヴァルを非難すべき，非難すべきでないという両立場のエビデンスをこれら４つの資料から抽出し，最終的に自身はどちらの立場を支持するのかを表明する。本小単元は，本章を貫く因果関係とは異なる人物像の考察という歴史探究を求める発展的な小単元である。

本章の構成の概観から，本章はシンガポール陥落の因果関係を３つの観点から考察することで，シンガポールはなぜ陥落したのかを考察する歴史探究として構成されていることが分かる。

（２）教科書構成の検討

本項では，前項で概観した５章の構成を，シラバス構成の検討と同様に，国民教育と教育改革の視点から検討する。その検討から，両視点に関わる教科書構成の特徴が挙げられる。

国民教育という視点に関わる特徴は，本章がイギリスの防衛計画からシンガポール陥落に至る過程に関するメタ物語で構成されていることである。イギリス軍と日本軍を物語の軸として，イギリスのシンガポール戦略，シンガポールとマラヤの防衛計画の想定の甘さと，第二次世界大戦の勃発での計画の破綻による軍隊の規律や士気から軍需物資に至るまでの全てにおいて劣ったイギリス軍，それら全てにおいて凌駕する日本軍が対比的に記述される。そして，イギリス軍が難攻不落の要塞としてシンガポールを防衛していると考えていたが裏切られたシンガポール人，シンガポールが陥落するまで必死に抵抗したマラヤ連隊といった両軍の中でのシンガポール人の苦難が描かれる。本章は，シンガポール陥落というシンガポールの発展にとっての危機的状況を，シンガポール人の苦難の歴史として描く国民の歴史であるといえる。

教育改革の視点に関わる特徴は３点挙げられる。第１は，本章では首尾一貫した歴史探究が図られていることである。導入で提示された，シンガポールがなぜ陥落したのかという本章を貫く探究の問いを解明するために，シンガポールが難攻不落の要塞であったのかを３つの観点から検証し，シンガポール陥落の因果関係を明確にする。本章を通して，一貫してシンガポール陥落の因果関係に基づいて，シンガポールの陥落を考察する歴史探究が貫かれている。

第２は，歴史探究のスキルの育成を図る点である。本章で扱う資料の大半が文献史料であり，文献史料を比較して，推論し，推論を調整するスキルの育成がめざされる。難攻不落のシンガポールに関する多様な解釈を読み取り，解釈の妥当性を検証するには文献史料が最適であるため，本章では文献史料を比較するスキルの育成が重視されている。

第３は，歴史探究の多様な可能性が提示されていることである。本章では，シラバスに掲げられた歴史的概念としての因果関係に基づいた歴史探究がなされているが，最後の小単元では，パーシヴァル将軍がシンガポール陥落に及ぼした影響を考察するという歴史探究が求められる。この探究は，同じく歴史的概念としての意義（Significance）に基づく歴史探究である。

以上の歴史科教科書の特徴から，シンガポール陥落までのシンガポールの苦難の歴史という規定されたメタ物語が描かれつつも，なぜシンガポールが陥落したのかという問いを一貫して探究するという歴史探究，それに関わるスキル，発展的な歴史探究がなされており，国民教育と教育改革の両視点が組み合わされた構成であることが明らかとなった。

Ⅳ．シンガポールの歴史教育の展開と課題

本章では，これまでのシラバスと歴史科教科書の分析に基づき，シンガポールの歴史教育の展開と課題を考察する。第Ⅱ章では，導入や重要な文献は，国民教育と教育改革の視点からの記載を併記し，内容は理念としての国民教育の視点を反映したシンガポールの発展のメタ物語で構成し，規定されたメタ物語の獲得とは相容れない教育方法と評価では教育改革の視点に即した歴史探究とその評価を提案するという章ごとに異なる理論的基盤に基づいて構成されていることを検討した。

これより，シラバスは一貫した構成になりえていないと判断できる。シラバスの目的では，ナショナル・アイデンティティを共有する国民と，批判的思考力を持つ市民という相反する国民・市民像が併記される一方で，教育方法である歴史探究とその評価とは結びつかないナショナル・アイデンティティは評価対象から除外されるといった矛盾が生じている。つまり，シラバスは，国民統合を図る国民教育を理念とし，各単元の学習ではシンガポールの発展というメタ物語を理解させつつ，そのメタ物語を探究させることで，教育改革がめざす知識やスキルを育成し，それを評価するといった相反する価値が混在したダブル・スタンダードのもとで歴史教育が展開されているのである。このダブル・スタンダードに基づく構成が，シンガポールのシラバスの課題であるといえよう。

第Ⅲ章では，シンガポール陥落までのシンガポールの苦難の歴史という規定されたメタ物語が描かれつつも，なぜシンガポールが陥落したのかという問いを一貫して

探究するという歴史探究，それに関わるスキル，発展的な歴史探究がなされており，国民教育と教育改革の両視点が組み合わされた構成であることを究明した。この教科書構成は，シラバスの準拠に起因するものである。主軸をなすメタ物語とシンガポール陥落を巡る歴史探究という国民教育と教育改革の視点が教科書構成の基調をなしており，ダブル・スタンダードというシラバスの課題が歴史科教科書にも如実に現れている。

全国統一のシラバスと歴史科教科書で実施されるシンガポールの歴史教育が本シラバスと本教科書に規定されることは必然であり，その歴史教育も当然，ダブル・スタンダードになることが予想される。国際的に進展する教育改革を鑑みると，シンガポールのダブル・スタンダードのもとでの歴史教育には課題があると考える。それは，国家が規定するメタ物語に沿ったナショナル・アイデンティティの育成を最上位の目標とした歴史探究では，メタ物語の妥当性が検証されることがない予定調和的な探究とならざるをえないからである。

本来，歴史探究とは，生徒自身の好奇心や問題意識に基づく問いを出発点として，収集した史資料を比較検証し，史資料の解釈を検討する脱構築や史資料から解釈を形成する再構築を経て，自分なりの歴史像を構築することで，自身の問いの回答を導くという自発的かつ自律的な歴史的思考に基づく活動である。この歴史探究こそが，グローバル・アイデンティティや批判的思考力を持つ市民を育成する教育改革の実現を，歴史教育の観点から推進するのである。本稿でのシンガポールのシラバスと教科書の分析から，国民統合を図るシンガポールの歴史教育では真の歴史探究はなされず，従って，現在求められる教育改革に対応した資質・能力の育成を保証することはできないという結論が導き出される。

Ⅴ．総括

本稿では，シンガポールのシラバスと歴史科教科書を分析し，ダブル・スタンダードのもとで歴史教育がなされるというシラバスと歴史科教科書の課題を明確にすることで，シンガポールの歴史教育では，真の歴史探究がなされず，教育改革に対応した資質・能力の育成は保証できないという結論を導いた。

シンガポールの国民教育が全カリキュラムを通して推進されている以上，国民教育と教育改革を軸とするダブル・スタンダードは，全教科に及ぶと予想される。本稿では，ダブル・スタンダードのもとでは，教育改革に対応した資質・能力の育成は保証できないと結論づけたにもかかわらず，実際には，国際学力調査の結果から，シンガポールの教育はナショナル・アイデンティティと教育改革に対応する資質・能力を並行して育成していることが裏付けられた。本稿の結論に反して，両者をともに育成している理由を，本稿が対象とした歴史科から推測することは可能である。歴史科教科書の各単元において首尾一貫した歴史探究自体はなされており，史資料の読解，比較，エビデンスの検証といった歴史探究に関わる資質・能力の育成が終始図られている。歴史科は国際学力調査と直接関わる教科ではないが，これらの資質・能力の育成は，読解力の向上に寄与すると予想される。全科目において歴史科と同様の論理で教育がなされれば，ナショナル・アイデンティティを基盤としつつ，教育改革に対応した資質・能力も育成することができると推測される。

しかし，少なくとも歴史科においては，このナショナル・アイデンティティを基盤とした資質・能力の育成は問題を孕んでいる。シンガポールの歴史教育は，真の歴史探究ではなくとも，歴史探究に関わる資質・能力を育成できることを示している。これは，極めて憂慮すべきことである。確かに，シンガポールの歴史教育における歴史探究は首尾一貫しており，その歴史の探究方法から多くを学ぶことは可能である。しかし，その歴史教育では，市民の育成とは結びつかない，いわば，国家がめざす国民を育成するという閉じられた最上位の目標のための歴史探究がなされているのである。そのため，シンガポールの教育改革から拙速に示唆を得ようとすることには慎重になるべきである。とりわけ，ナショナル・アイデンティティの形成と深く関わらざるをえない歴史教育は，歴史的思考を通して市民を育成するという開かれた最上位の目標をめざすことが大前提であり，国際研究においては，どのような理念のもとでどのような論理に基づいた歴史的思考，歴史探究が図られているのかを慎重に検討することが不可欠であるといえよう。

【註】

1 東アジア教員養成国際共同研究プロジェクト編『「東アジア的教師」の今』，東京学芸大学出版会，2015 年，野中陽一・胡啓慧「東アジア型教育の情報化モデルに対応した教師教育実践の試み」横浜国立大学大学院教育学研究科編『教育デザイン研究』第 14 巻第 2 号，2023 年，pp.29-35 など参照。

2 梅宮直樹「東南アジア地域における高等教育の質保証と国際連携」日本比較教育学会編『比較教育学研究』第 48 号，2014 年，pp.83-92，牧貴愛・平田仁胤・岡花祈一郎「東南アジアの教師教育者に求められる条件－タイ・カンボジア・ベトナムの公募文書の比較研究－」『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要教育学研究』第 2 号，2021 年，pp.268-276 など参照。

3 南部広孝は，日本比較教育学会紀要掲載論文における研究対象国の分布を 4 期に分けて検討し，東アジア，東南アジアはともに第 2 期以降継続して全体の 10％以上を占めており，特に東南アジアは第 2 期（1990 年から 2004 年まで）に 20.0％，第 4 期（2012 年から 2020 年まで）には 28.9％を占めるとし，主要な研究対象国となっていることを明らかにする。南部広孝「アジア教育研究の可能性－比較教育学の視点から－」日本教育社会学会編『教育社会学研究』第 108 集，2021 年，pp.96-98 を参照。

4 例えば，池田充裕「シンガポールのカリキュラム・

マネジメントと授業の質保証」原田信之編著『カリキュラム・マネジメントと授業の質保証－各国の事例の比較から－』北大路書房，2018 年，pp.197-227，松尾知明『21 世紀型スキルとは何か－コンピテンシーに基づく教育改革の国際比較－』明石書店，2015 年，pp.186-203，シム　チュン・キャット「第８章　シンガポール」志水宏吉監修，ハヤシザキカズヒコ・園山大祐・シム　チュン・キャット編著『シリーズ・学力格差　第４巻＜国際編＞世界のしんどい学校－東アジアとヨーロッパにみる学力格差是正の取り組み』明石書店，2019 年，pp.144-168 を参照。

5 例えば，酒井喜八郎「批判的思考力を育成するシンガポールの社会科授業」『南九州大学人間発達研究』第 6 巻，2016 年，pp.83-92，内藤裕子「シンガポール歴史教科書における史資料に基づいた探究課題－GCE-O レベルに基づく歴史教育の特色－」日本社会科教育学会編『社会科教育研究』第 135 号，2018 年，pp.40-51，小川涼作「アジア・太平洋に対する複眼的な歴史認識の育成－シンガポールの歴史教科書における日本による占領に関する記述を題材として－」日本社会科教育学会編『社会科教育研究』第 141 号，2020 年，pp. 118-129 を参照。

6 黒田明雄「シンガポールにおける国民・市民形成の教育の特質－『Singapore:The Next Lap』と現行カリキュラムの分析を通して－」『倉敷芸術科学大学紀要』第 14 号，2009 年，pp.179-191，酒井喜八郎「シンガポールにおける CCE（人格・市民性教育）の内容と特質－シラバスと教科書分析を中心に－」社会系教科教育学会編『社会系教科教育学研究』第 27 号，2015 年，pp.91-100，吉田剛「シンガポール中学校低学年地理教科書情報にみるナショナルシティズンシップ育成」『宮城教育大学　情報処理センター研究紀要』第 26 号，2019 年，pp.83-90，奥村みさ「シンガポールにおける多文化教育－中等学校社会科教科書分析を中心に－」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』第 23 号，2021 年，pp.109-128 を参照。

7 池田充裕「シンガポール－“官製シティズンシップ”の背景と実態」嶺井明子編『世界のシティズンシップ教育－グローバル時代の国民 / 市民形成－』東信堂，2007 年，pp.68-81，同上論文（黒田），pp.179-180，吉田剛「シンガポール中学校低学年地理科シラバスにおけるナショナルシティズンシップ育成」社会系教科教育学会編『社会系教科教育学研究』第 22 号，2010 年，pp.42-43 を参照。

8 前掲書４）（松尾），p.186。

9 前掲論文７）（吉田），pp.48-49 を参照。

10 前掲論文６）（奥村），p.125 を参照。小仲珠世は，前期中等段階の 1999 年版シラバスと 2007 年版シラバスの日本占領期の記述を比較し，集合的記憶を通した国民統合を巡る社会情勢の変遷を 2008 年の時点で既に論じている。小仲珠世「シンガポールの社会科・歴史教科書にみる記憶と国民統合－「日本占領期」の記述を中心に－」名古屋多文化共生研究会編『多文化共生研究年報』第 5 号, 2008 年, pp.61-79 を参照。

11 Ministry of Education, Singapore: History. Teaching and Learning Syllabuses. Lower Secondary. Express Course. Normal（Academic）Course. 2021.

12 Ministry of Education, Singapore: Singapore. A Journey Through Time, 1299-1970s Secondary One. Star Publishing 2021.

13 Ministry of Education, Singapore: Singapore. A Journey Through Time, 1299-1970s Secondary Two. Star Publishing 2022.

14 op. cit.12）, pp. Ⅳ - Ⅶ.

注記：本研究は，文部科学省科学研究費補助金基盤研究 B（課題番号　23 K 20706）の助成を受けたものである。